

# 縄文時代のブタ飼育について

## Domestication of Pigs in the Jomon Period

西本豊弘

はじめに

- ① 縄文ブタの議論
- ② 下太田貝塚のイノシシ
- ③ 縄文時代のイノシシ家畜化の検討
- ④ 結論

### [論文要旨]

これまで、一般的に縄文時代の家畜はイヌのみであり、ブタなどの家畜はいないと言われてきた。しかし、イノシシ形土製品やイノシシの埋葬、離島でのイノシシ出土例から縄文時代のイノシシ飼育が議論されてきた。イノシシ飼育の主張でもっとも大きな問題点は、縄文時代のイノシシ骨に家畜化現象が見られなかったことである。ところが縄文時代のイノシシ骨の中にも家畜化現象と疑われる例があることが分かった。また、イノシシがヒトやイヌと共に埋葬されている例が知られるようになり、改めてイノシシについてヒトやイヌとの共通性を議論する必要があるが出てきた。

そこで、本論では千葉県茂原市下太田貝塚出土資料を紹介するとともに、イノシシ形土製品・イノシシ埋葬・離島のイノシシ・骨格の家畜化現象の4項目について再検討した。その結果、文化的要素からみれば、縄文時代中期以降にブタが飼育されていたことはほぼ確実である。また、離島への持ち込みという文化的項目と骨格の家畜化現象の点から見ると、縄文前期からすでにブタが飼育されていた可能性が大きいことが分かった。しかし、縄文時代のブタは、骨格の変化が小さいことから、野生イノシシと家畜のブタが交雑可能な程度のかかなり粗放的な飼育であったと推測された。ブタの存在がほぼ確実になったことは、縄文時代が単純な狩猟・漁労・採集経済ではなく、イヌとブタを飼育し、ある程度の栽培植物を利用する新石器文化であったことを意味するものである。

## はじめに

縄文文化について最近様々な再検討が行なわれている。生業活動に関してはヒョウタンなどの植物の栽培やクリ林の管理、また後期以降の稲作問題である。それらの問題と関連して、縄文時代にブタが飼育されていたかどうかの議論がある。これまで、一般的に縄文時代の家畜はイヌのみであり、ブタなどの家畜はいないと言われてきた。そのため、世界各地の新石器文化が農耕と土器と家畜を伴うことが多いことと比較して、日本列島の縄文文化は土器を大量に使用しながらも農耕を伴わず、家畜もイヌのみである点で特異な新石器文化とされてきた。

縄文農耕については、焼畑農耕や中期農耕論などが議論されてきた。最近では縄文早期からの栽培農耕の可能性が強くなってきた。家畜のブタについても、イノシシ形土製品やイノシシの埋葬、離島でのイノシシ出土例からイノシシ飼育が議論されてきたが、最近、イノシシがヒトやイヌと共に埋葬されている例が知られるようになり、改めてヒトやイヌとの共通性を議論する必要が出てきた。さらに、骨格の形質的特徴の検討によっても、家畜化を疑うイノシシ骨格が見つかるようになった。そこで、本論では新しい発掘事例を紹介して縄文時代に家畜のブタが存在した可能性について論じたいと思う。

### ①……………縄文ブタの議論

縄文時代には早期からイヌが飼育され、人と同様に土坑に埋葬された。イヌ以外の家畜はいないとされてきた。ところが、八丈島などの離島や野生イノシシの生息しない北海道でイノシシの骨が出土することや、イノシシの幼獣のウリボウを模した土製品があることから、直良信夫・江坂輝弥氏等によってイノシシ飼育が行われていたのではないかと言われてきた（直良1971、江坂1971）。それを考古学の立場から強く主張したのは加藤晋平氏である（加藤1980）。加藤氏は、離島でイノシシが出土すること・イノシシの幼獣が埋葬されていること・イノシシ形土製品が出土することの三点を挙げて、イノシシ飼育（ブタ飼育）を主張した。この三つの論点は、現在でも広く知られていることであり、動物儀礼や縄文人の宗教観とからめた議論が、その他でも行われている（嶋崎1979、小野1982・1984）。

筆者も、北海道で出土するイノシシについて述べたことがあり（西本1985）、また、骨格の形態的特徴から縄文時代にブタが飼育されていた可能性を指摘したことがある（西本1999・2001）。ここでは、この問題に深く関わる千葉県茂原市下太田貝塚の報告書が刊行された機会に、縄文時代のブタの問題について改めて述べることにする。

### ②……………下太田貝塚のイノシシ

下太田貝塚は、千葉県茂原市にある縄文時代中期・後期を主体とする遺跡である。この遺跡は、縄文中期と後期の人骨が約200体出土したことで知られており、しかも中期と後期で埋葬方法が異な

る点で注目されている。動物の問題については、縄文中期の屈葬人骨群のなかにイノシシ若獣が屈葬の状態に埋葬されていたことでも知られている（菅谷・樋泉1998）。これは、縄文時代におけるイノシシの若い個体が人骨と同様に埋葬された最も古い例である。またこの遺跡では、ヒトの幼児に隣接してイノシシの幼獣3体とイヌ若獣1体が埋葬されていた。さらに、これらを含めて出土したすべてのイノシシ骨格を調べてみると、家畜化の特徴を示す資料がごく少量ではあるが含まれていることが分かった。これらの内容はすでに発掘報告書に記載しているが、ここでは本論と関連するイノシシとヒトとイヌとの関係を中心に紹介しておく。（西本・姉崎・太田2003）。

#### a. イノシシ若獣の埋葬

この例は、すでに菅谷通保・樋泉岳二氏によって詳しく報告されているが（菅谷・樋泉 前掲）、縄文中期の屈葬人骨がまとまりを成してひとつの墓域を形成していた中に、イノシシ若獣（2号獣）がヒトと同様に屈葬状態で埋葬していた例である（写真1・図1参照）。イノシシ頭部は埋葬後に河道により失われているので、頭蓋骨の形態は分からない。残されていた四肢骨を見ると骨体は比較的大きいが、四肢骨の関節が骨化していないので、生後一歳程度と推測される。当歳の幼獣かも知れないが、四肢の大きさから一応若獣個体と呼んでいる。手足は体側に沿って曲げられており、側臥に近い埋葬姿勢であった。骨の保存状態とその位置から見て、解体されておらず、食用とはされていないであろう。おそらく一体そのままが単独の墓に埋葬されていたと思われる。このイノシシ埋葬例は、人間に対して副葬された可能性もあるが、イノシシそのものを葬ったと考えても不自然ではない。

すでに述べたように、若いイノシシを人骨と同様の方法で埋葬する例は、縄文時代でこの例が唯一のものである。この例が、もしイノシシそのものを埋葬する目的であったとすれば、縄文中期中頃にこの地域ではイノシシを人と同様に特別に扱う慣習があったと考えざるを得ない。ただし、イノシシの若獣の埋葬が一体だけであり、他のイノシシが食料とされてバラバラの状態出土するこ



写真1 下太田貝塚のイノシシ若獣（2号獣）の埋葬状態

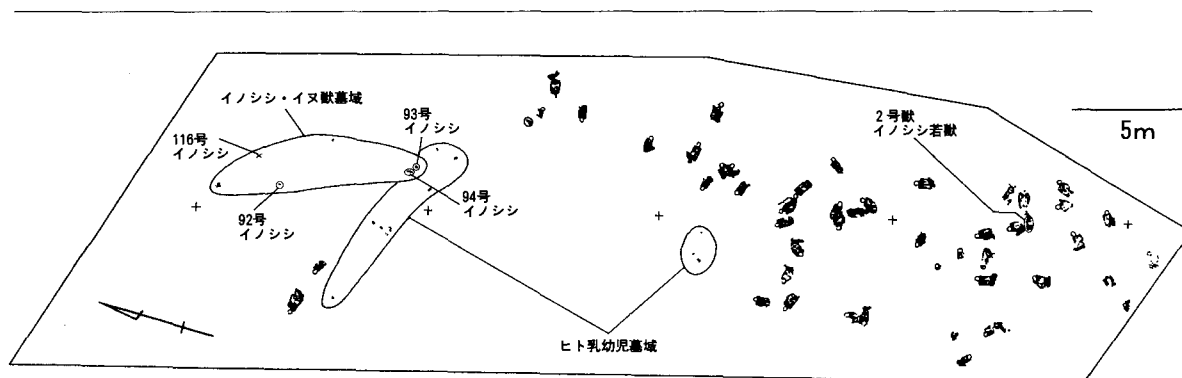


図1 下太田貝塚縄文中期のヒト・イヌ・イノシシの墓の配置  
(No.116の出土位置は、おおよその場所である)

ととの関連については今後議論すべきである。

#### b. イノシシ幼獣の埋葬

下太田貝塚の中期の段階では、大人は屈葬で一定の地域に埋葬される（図1参照）。その墓域の外側にイノシシの幼獣3体とイヌの若獣とヒトの乳児が埋葬されていた。特に、イノシシとイヌは中期の墓域の南側にまとまって出土した。出土位置は報告書を参照していただきたい。それらのイノシシやイヌの年齢を詳しく調べてみると、資料no.92のイノシシは、筆者の所有する死産児及び生後1・2週間の飼育イノシシの骨格標本と比較すると、第4乳臼歯が萌出途中であり、死産児または出産直後に死亡した乳児である。no.93・116のイノシシも第4乳臼歯の萌出が不完全であり、生後1・2週間以内に死亡した乳児である（写真3）。no.94のイヌは、第一後臼歯が萌出していることから、生後3・4ヶ月に死亡した若獣段階の個体と推定される。この中で、イノシシは全て出産直後から1・2週間以内の死亡例であることが注目される。従来、縄文時代にイノシシの幼獣が埋葬されていることはよく知られており、それは、偶然、縄文人がイノシシの仔を捕まえ、その仔を食料とせず葬ったなどといわれてきた。しかし、年齢をよく観察してみると、下太田貝塚例では出産直後の個体であることがわかった。すなわち、縄文人がイノシシの出産直後に死亡した仔を埋葬したことになる。下太田貝塚で見たように、ヒトやイヌと同様に一定の場所（墓域）にイノシシの乳児を埋葬しているわけであり、それは偶然ではなく慣習であったと考えざるを得ない。そうであるとすれば、わざわざ野生イノシシの乳児を拾って埋葬したというよりも、出産を管理していたイノシシの死産児や死亡した乳児を埋葬したのではないかと考える方が自然であろう。つまり、イノシシ幼獣（乳児も含む）の埋葬は、偶然の事例ではなく、イノシシ飼育を背景として行なわれた葬送儀礼のひとつとして位置付けられるものであろう。

#### c. イノシシ骨格に見られる家畜化現象

下太田貝塚では、縄文中後期で約3000点のイノシシの骨が出土しており、最小個体数は約130である。その中で、家畜化現象の可能性があるのは頭蓋骨1点と下顎骨4点である。まず頭蓋骨についてみると、写真4に示したものであるが、上顎骨と後頭部が残っていた若獣のものである。冠状縫合の後方への張り出しが弱く、冠状縫合がなだらかな弧状を呈している。これは後頭部が幅広であ



写真2 縄文時代中期後葉 埋葬されたイノシシ若獣（2号獣）の骨格

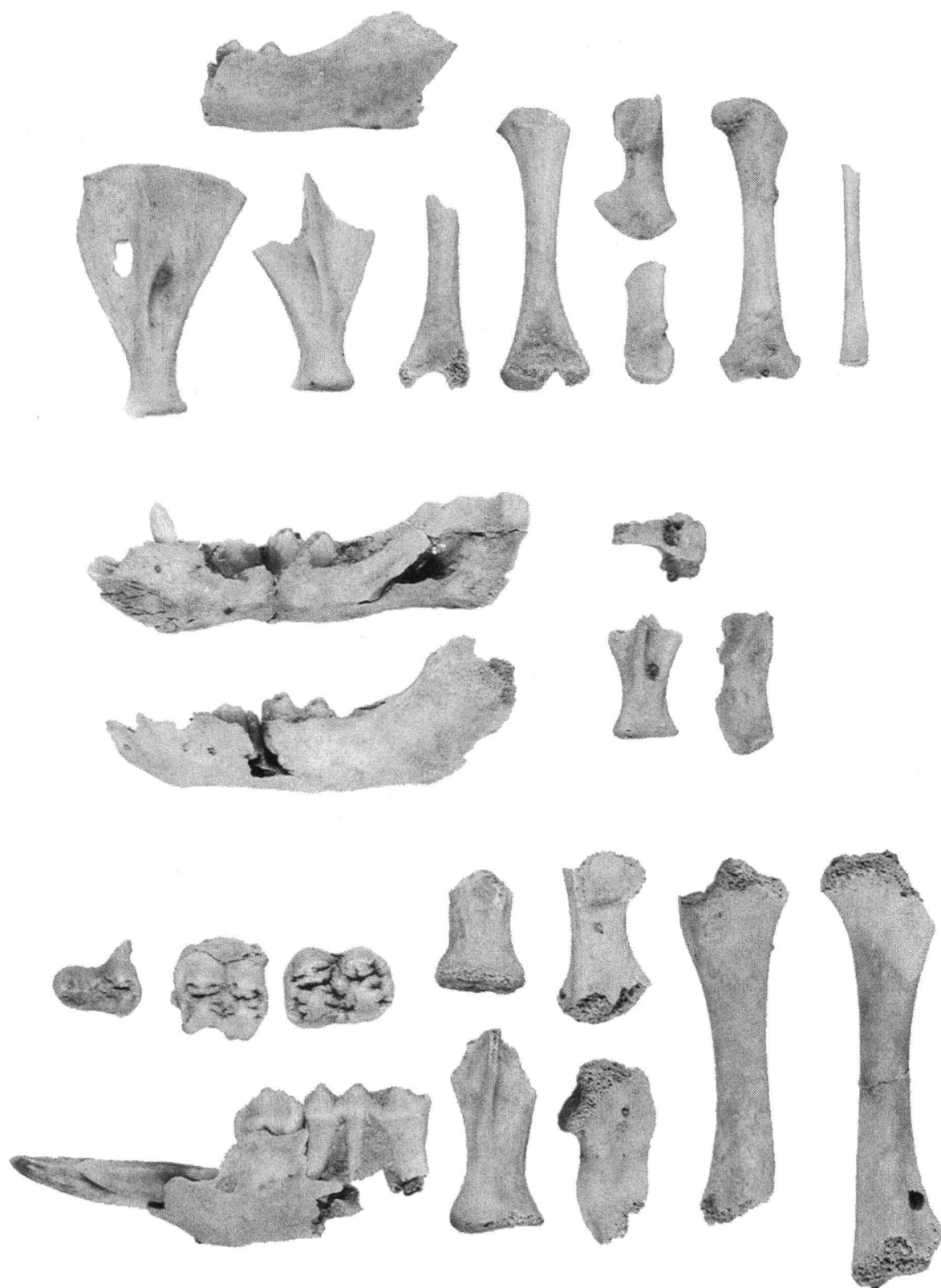


写真3 下太田貝塚出土の埋葬されたイノシシ幼獣（縄文中期）  
上：92号 中：93号 下：116号

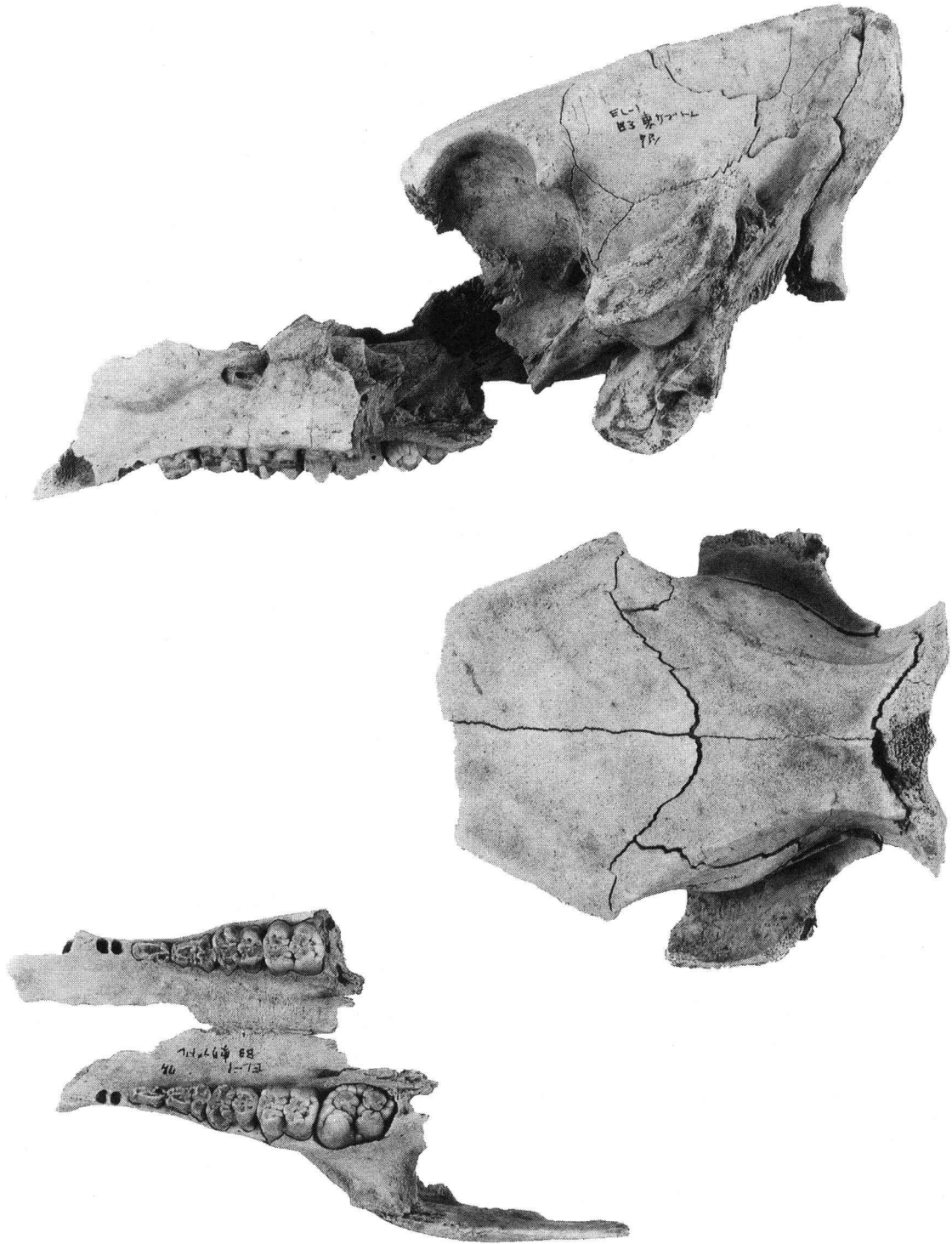


写真4 下太田貝塚のイノシシ頭蓋骨



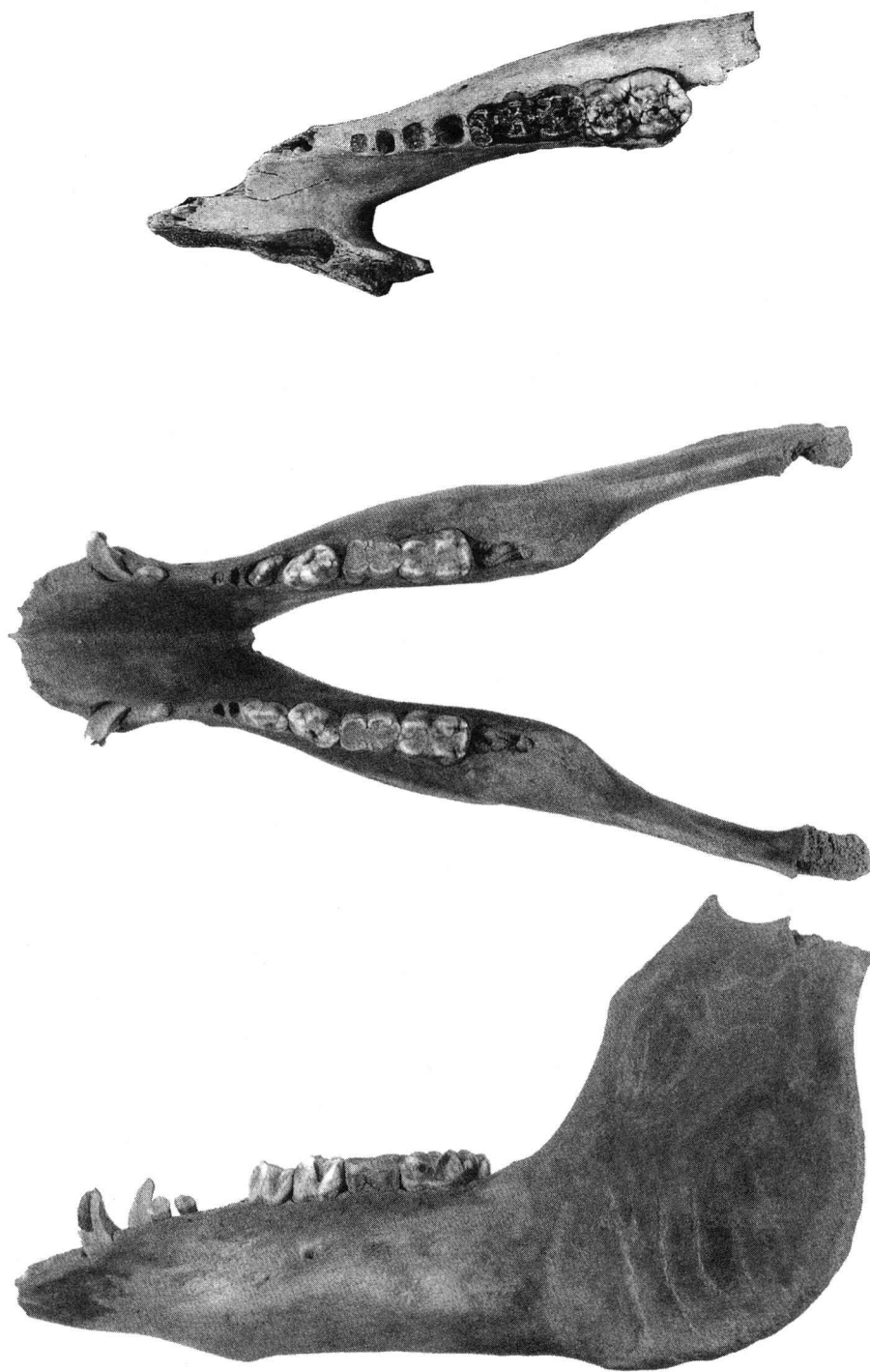


写真5 下太田貝塚出土のイノシシ下顎骨  
上：肥大化した幼獣下顎骨 中・下：歯列の乱れた若獣下顎骨



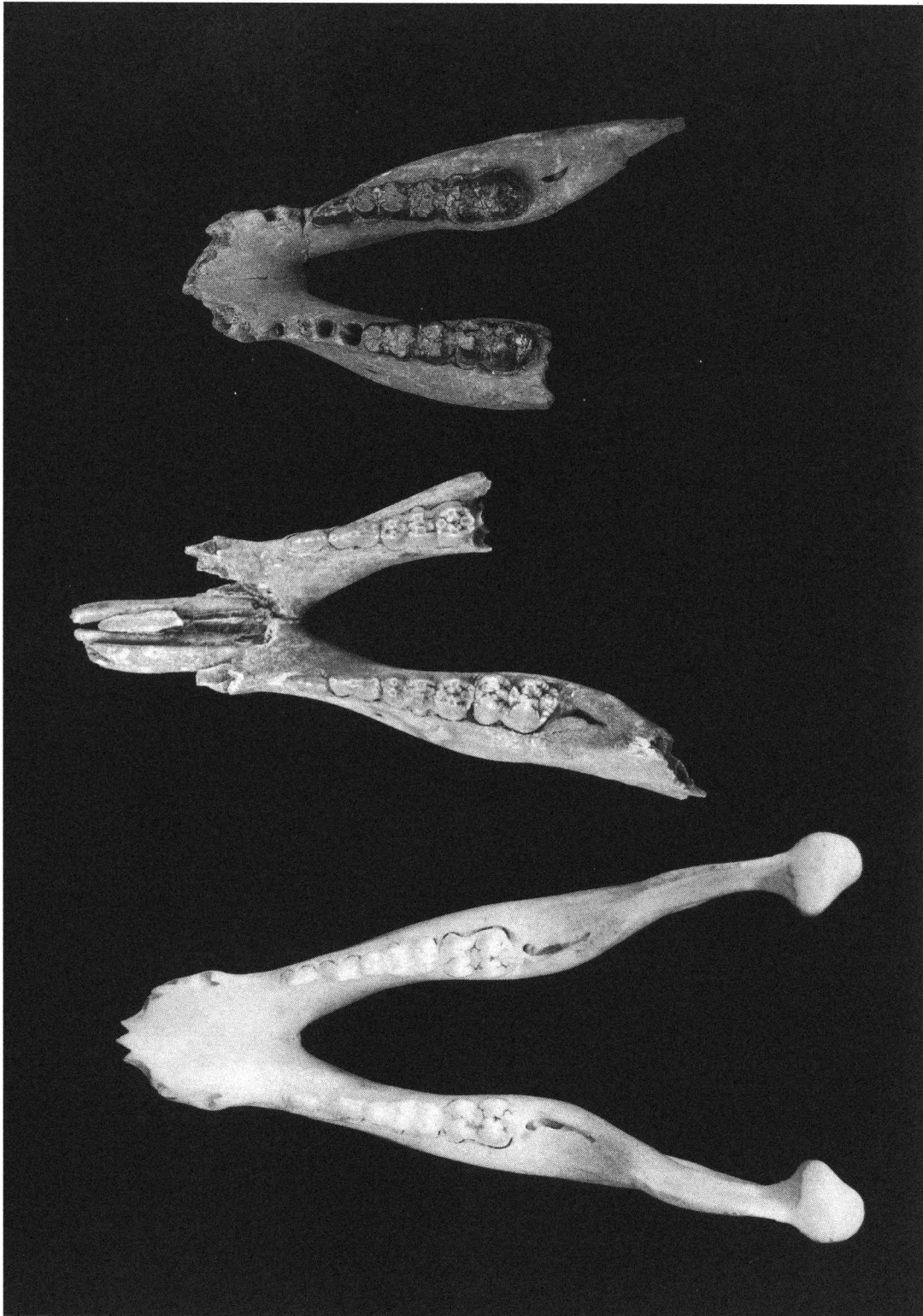


写真6 イノシシ幼獣下顎骨

上：鳥浜遺跡出土の肥大化した下顎骨 中：内野第1遺跡出土の肥大化した下顎骨  
下：現生イノシシ幼獣下顎骨（上2列とほぼ同年齢）

ることを示しており、弥生ブタにも認められる典型的家畜化現象のひとつである。上顎歯をみると、右側第2後臼歯が不完全萌出の段階であるが第2後臼歯の後部が小さく萎縮しており生育異常であることが分かる。このような歯の生育異常はオホーツク文化のブタで見たことがあり、栄養不足や日照不足などの不健康な環境での生育阻害と推測している。このような生育異常も家畜化を示す証拠のひとつである。

イノシシ下顎骨については、この遺跡では左右あわせて155点出土しており、そのうち4点で下顎骨体の肥大化と歯列の乱れがみられた。たとえば、写真5の下に示した資料は、第3後臼歯が萌出していないにも拘わらず、第1後臼歯の磨耗は著しく、また第2・3・4前臼歯の歯列がかなり乱れて歯がずれて生えている。この個体は前臼歯の萌出状態から見て、おそらく2歳から3歳未満であろうが、下顎骨が縮小したため、前臼歯の永久歯の生える余地が少なく、骨体に斜めに生えざるを得なくなり、また第3後臼歯も萌出できなかったであろう。下顎連合部の下底部も上方にくぼんでおり、弥生時代以降のブタとの共通する家畜化の特徴を示している。この他の3点は、すべて骨体の肥大化した下顎骨である。その資料はすべて形質が年齢と共に変化する幼獣と若獣であることから、それらの下顎骨のみで家畜化現象を明確に捉えることはできないが、骨の肥大化は筆者が以前から指摘している家畜化の一つである。下顎骨だけではなく骨格全体の肥大化は、現在の家畜ブタでは世界的に共通に見られる特徴であり、中国の殷代以降や日本の古墳時代・江戸時代のブタでも顕著に見られる形質的特徴のひとつである。ただし、この肥大化現象が野生動物の場合にどの程度みられるのか、また栄養や運動量などによって骨の発育にどの程度の個体差が生じるのか十分に検討していない。

下顎骨の肥大化した資料については、縄文時代の遺跡では、すでに紹介した鳥浜貝塚と内野第1遺跡以外では知られていない(写真6参照)。これらが下太田・内野第1・鳥浜の各遺跡だけの特殊な例であるとすれば、単なる個体差と言えるが、そうでないとすれば、初歩的段階か小規模の家畜化を示す可能性がある。イノシシ骨格の肥大化現象は、筆者も弥生ブタの主張以降に注目した特徴であり、これまで動物考古学研究の中であまり注目されていない形質である。今後、縄文時代の資料の再検討が行なわれれば、新たな事例が発見される可能性が大きいと言える。

### ③……………縄文時代のイノシシ家畜化の検討

以上、イノシシの家畜化に官憲して下太田貝塚で発見された新しい事例を紹介してきた。そこで、縄文時代にイノシシが飼育されていたかどうかについて、加藤晋平氏が指摘された点を、下太田貝塚の事例を含めて再検討を行なってみた。

#### a. ヒト・イヌ・イノシシの埋葬

下太田貝塚の縄文中期では、ヒトとイヌとイノシシが埋葬されていた。そのうちイヌが縄文時代の当初から家畜として縄文人に飼われていたことはよく知られている。そのイヌは、中国大陸では食料とされたが、縄文文化では狩猟犬として用いられ、死ねばヒトと同様に墓坑に埋葬された。縄文後期になると、イヌとヒトが同一の墓域に埋葬されるようになる(西本1983)。一方イノシシは、シカと同様に縄文時代の主要な狩猟獣であり、シカとほぼ同量狩猟されていたことが知られている

(西本1991)。シカの埋葬は、これまで縄文時代には全く知られていない。それに対して、イノシシの幼獣の埋葬は、少なくとも縄文中期以降に知られており、前期にも埋葬されていた可能性が高い。そして、後期になると、下太田貝塚で示したように、若獣がヒトの墓域の中に、また幼獣がヒトの墓域の外に埋葬されるようになる。後期にもそれが受け継がれる。このように考えると、野生のイノシシが日本列島で生息していたとしても、それとは別に飼育されていたイノシシ類、すなわちブタが存在し、それが埋葬される場合もあったと考えるべきであろう。すなわち縄文時代において、ヒト・イヌ・ブタが埋葬されるのは、それらは全て家畜化された動物である点で共通していたからである。

#### b. 家畜化を示すイノシシ骨格

イノシシから家畜のブタへの骨格の変化は、野生イノシシと家畜ブタが交配可能であることから種レベルの相違ではなく、生育環境の変化による個体の獲得形質が人間により選別され固定化された結果である。したがって、イノシシとブタは同じ歯列を持ち、ブタもイノシシと同様に上下左右の犬歯を持つのである。それでは、イノシシからブタへの家畜化現象をどのように捉えるかであるが、家畜化による骨格の変化のうち頭蓋骨では長さが短くなることが分かっている。この短頭化は、後頭部が丸くなることや吻部が短くなる現象でもあり、顎骨の縮小も伴う。骨格の中でも歯は骨よりも保守的と言われており、歯の大きさと顎骨の大きさのアンバランスが家畜化の指標となることもある。ただし、歯の大きさも島嶼化や家畜化の影響で縮小することが知られており、特に第3後臼歯の縮小は家畜化の証拠として利用されてきた。現在の動物考古学の知見でみると、歯の縮小が認められる場合は、かなり家畜化の進んだ段階であると言える。

さて、縄文時代のイノシシ骨格に家畜化現象が見られるかどうかである。すでに述べたように最近発掘された資料を中心に調べてみると、福井県三方町鳥浜貝塚・千葉市内野第1遺跡と茂原市下太田貝塚出土のイノシシ下顎骨の中で、年齢に比較して肥大している資料を認めた。ただし、それらは鳥浜貝塚1点(姉崎2002)・内野第1遺跡1点(西本・姉崎・太田2001)・下太田遺跡4点(西本・姉崎・太田2003)であり、大部分のイノシシ下顎骨には肥大は認められなかった。鳥浜貝塚出土例は、すでに姉崎智子により報告されているが、写真6に示したものである。現生イノシシの同年齢の幼獣の下顎骨と比べると、骨体が肥大していることがよく分かる。内野第1遺跡の例は破損した資料であるが、写真6に示したように鳥浜貝塚例と同様に骨体の肥大化が明瞭に観察された例である。なお、すでに述べたように、下太田貝塚のイノシシ頭蓋骨の1点には、弥生ブタでよく見られる後頭部の短頭化と歯の萎縮が見られた。

これらの事例は、遺跡全体のイノシシ骨の出土量に比べてごく少量であることと、若い個体に限られることが問題である。また、野生イノシシの生育異常の頻度がどの程度であるか分かっておらず、ここで議論した骨の肥大化などの現象が野生イノシシにも起こる可能性があり、生育異常だけでは家畜化を積極的に主張できない。しかし骨の肥大化は、その個体の出生後の食料と運動量などの後天的要因が関連しており、一代限りの飼育によっても起こる家畜化現象の可能性もある。そうであるとすれば、弥生時代以降に想定される慣習化したブタ飼育ではなく、非連続的なイノシシの飼育か、または野生イノシシとの交配も可能な粗放な環境でのブタ飼育の可能性も縄文時代のブタ飼育では考えられるのではなかろうか。

### c. イノシシ形土製品について

縄文時代の動物形土製品は様々なものが知られているが、その中で最も出土量が多いのは、ヒトを除けばイノシシ形土製品である。設楽博巳氏によると、1996年の段階でイノシシ形土製品は89例、シカは3例出土している（設楽1996）。どの特徴をイノシシとするかについては様々な意見があり、このイノシシ形土製品の数量についても人によって異なるが、シカよりもイノシシの方が圧倒的に多いことは明らかである。先にも述べたように、シカとイノシシは縄文時代に同程度利用されているのに対して、土製品として表現される程度はイノシシの方が圧倒的に多い。この点でも、縄文人のイノシシに対する特別な感情を示しているといえる。イノシシは多産であるために、シカよりも表現されたという説もあるが、筆者は北海道出土のイノシシについて、焼骨として出土する例が多いことから、イノシシ類が儀礼的に用いられることとの関連を主張したことがある（西本1985）。古墳時代以降の動物形土製品が、明器や形代として利用されている例から考えれば、イノシシ形土製品についても、生きたイノシシまたはブタの代用品としての用途も考えるべきである。その場合、野生イノシシの代用の可能性もあるが、家畜のブタの代用であったとも考えられる。

### d. 離島でのイノシシ骨格出土の意味

イノシシは、日本列島の中で本州や四国・九州・南西諸島などに生息している。しかし、北海道の南部で縄文時代後期・晩期の遺跡で出土したことが知られている。また、八丈島・伊豆諸島などの離島の遺跡では縄文時代前期以降に出土する。佐渡島でも縄文時代の遺跡から出土している。このうち佐渡島の遺跡から出土したイノシシは、最近のミトコンドリアDNA分析によれば、洪積世に日本列島のイノシシから分離した可能性が考えられる（渡部他2002）。北海道と伊豆諸島のイノシシについては、本州のものとDNAが一致しており、本州からもたらされた可能性が高いといえる（石黒2001）。北海道のイノシシ及び伊豆大島のイノシシについては、筆者がみたところ、本州のイノシシと形態的に変わらない。八丈島のイノシシについては、かなり小型化し、歯の形態も縮小しており、島嶼化が進んだものか、またはニホンイノシシとは別系統のものが持ち込まれたものかのいずれか考えられる。この見解に近いものは山崎京美氏他も述べている（山崎2001）。

八丈島と伊豆大島のイノシシについては、いずれも持ち込まれたものであり、イノシシが泳いできたものではない。特に島嶼化現象が伺える八丈島などでは、生きたままイノシシが船によって運ばれていた可能性が強い。すなわち、ブタとして飼育されていたものが船に乗せられて運ばれ、八丈島に生きたまま持ち込まれたと推測される。八丈島の遺跡は縄文時代前期であることから、少なくともイノシシの一時的飼育は、縄文時代前期に行なわれていたと考えざるを得ない。

## ④……………結論

以上、縄文時代のブタ飼育の可能性を考えてきた。加藤晋平氏がイノシシ幼獣埋葬やイノシシ形土製品の出土や離島でのイノシシ骨格出土例を根拠として、イノシシ飼育の可能性を改めて主張されてから20年以上経過した。その後、イノシシがヒトやイヌと同様に埋葬されることや、イノシシ形土製品が時期を限って出土すること、離島でイノシシが出土することなど、これまでに知られている家畜ブタに関する状況証拠を再検討してきた。さらに骨格に見られる家畜化を示す特徴につい

でも述べてきた。その結果、縄文時代にイノシシが飼育されていたこと、即ちブタが飼育されていた可能性がさらに高まった。しかし、これらの証拠では、まだ確実に縄文ブタが恒常的に存在していたとは言えない。形質的变化など、もっと確実な証拠が必要である。

しかしながら、縄文時代早期から栽培農耕が行なわれていた可能性が強くなったことも考慮すると、縄文人が野生イノシシを捕獲して飼育した可能性は十分考えられる。むしろ、八丈島でのイノシシ類出土が前期であることから、栽培農耕を行っていた人々は、早期からイヌとブタを飼育していたのかもしれない。縄文時代はシカとイノシシが主要な狩猟獣としていたが、同時に飼育されたブタも存在していたのではなかろうか。

縄文時代中期以降のイノシシ形土製品の発生と後期・晩期の出土例については、縄文社会の変化により、生きたイノシシまたはブタの代わりに土製品を用いるようになったと解釈できる。この変化を起こす要因については、早期以降のブタ飼育の継続性の中で考える場合と、外来文化の影響の二つが考えられる。たとえば、縄文時代中期に配石墓と土坑墓の二つのタイプの墓がひとつの集落で用いられていることから、何らかの階層性が存在したことは明らかである。また後期には大規模な配石遺構が作られることが知られており、縄文社会の複雑化と多様性が見られることは周知のとおりである。これらの縄文社会全体の動きの中で、ブタ飼育を背景に後期・晩期にイノシシ形土製品が多く使用されるようになったとも考えられる。外来文化の影響については、最近のわれわれの研究によって弥生時代早期と縄文晩期がほぼ並行であり、縄文晩期文化に対して弥生文化が大きく影響していた可能性が高くなった。すでに、縄文後期前半には岡山県で稲作が行われた可能性も強いといわれており、大陸の農耕文化が縄文後期の段階で日本列島に影響を与えていたことも考えられる。もし、その文化的影響が縄文中期までさかのぼるとしたら、縄文中期社会の変容もその影響の可能性を考えざるを得ない。このように、縄文時代のブタの存否を考えてきたが、この問題はブタだけの問題ではなく、縄文社会の動向と大きく関わっており、縄文文化の性格を考える手がかりのひとつと言えるのである。

最後に、本論をまとめるにあたり、下太田貝塚の資料を分類させていただいた菅谷通保氏をはじめとする総南文化財センターの皆様へ感謝致します。また、姉崎智子・小林園子両氏の協力を得たことに感謝致します。

注 下太田貝塚の1号獣とされたものは、1号人骨の下から出土したイノシシ幼獣で縄文後期である。本報告書分析編27頁のNo.不明のものである。

#### 引用・参考文献

- 姉崎智子 2002「鳥浜貝塚から出土した特異な形態のイノシシ下顎骨—飼育の可能性の検討—」鳥浜貝塚研究3, 1~10頁  
 江坂輝弥 1971「縄文人の作った猪形土製品」考古学ジャーナル52, 9~10頁  
 小野正文 1982「縄文時代の猪飼育」『歴史手帳』10-11, 4~8頁  
 小野正文 1984「縄文時代における猪飼育問題」『甲府盆地—その歴史と地域性』47~76頁, 雄山閣  
 加藤晋平 1980「縄文人の動物飼育—とくにイノシシの問題について」歴史公論6-5, 45~50頁  
 設楽博己 1996「つきあいのはじまり」国立歴史民俗博物館企画展示図録『動物とのつきあい—食用から愛玩まで—』91~104頁  
 嶋崎弘之 1979「縄文中期の動物供儀」どるめん27, 26~33頁  
 菅谷通保・樋泉岳二 1998「茂原市下太田貝塚の集団墓と動物の埋葬—ヒト・イヌ・イノシシ類の埋葬」動物考古学11, 69~74

---

頁

- 直良信夫 1971「古代人とイノシシ—その歴史をめぐって—」考古学ジャーナル52, 5～8頁
- 西本豊弘 1983「イヌ」加藤晋平他編『縄文文化の研究2 生業』161～170頁 雄山閣
- 西本豊弘 1985「北海道縄文時代イノシシの問題」古代探叢, 137～152頁
- 西本豊弘 1999「可能性が高まった縄文ブタの飼育」小林達雄編著『縄文学の世界』168～173頁 朝日新聞社
- 西本豊弘 2001「縄文時代のブタの問題」『先史時代の生活と文化』446頁, 日本人および日本文化の起源に関する学際的研究論文集
- 西本豊弘 2002「生業」季刊考古学80, 34～37頁
- 西本豊弘・姉崎智子・太田敦子 2001「動物遺体」『千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書 第3分冊』千葉市文化財調査協会, 115～122頁
- 西本豊弘・姉崎智子・太田敦子 2003「下太田貝塚出土の鳥類・哺乳類遺体について」『千葉県茂原市〔分析編〕下太田貝塚』財団法人 総南文化財センター他, 269～291頁
- 山崎京美・遠藤秀紀・高橋 理・菅原弘樹・石黒直隆 2001『縄文時代島嶼部イノシシの基礎的研究』平成11・12年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書
- 渡部琢磨・石黒直隆・森井泰子・中野益男・松井 章・本郷一美 2003「縄文・弥生時代の遺跡から出土したイノシシ属の遺伝的背景—Ancient DNA解析に基づく考察—」第6回動物考古学研究会での口頭発表

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

(2003年3月3日受理, 2003年5月9日審査終了)

---

## **Domestication of Pigs in the Jomon Period**

NISHIMOTO, Toyohiro

Until now, it has been said that in general during the Jomon period dogs were the only domesticated animals and that other animals such as pigs had not been domesticated. However, examples of earthen articles shaped like boars, the burial of boars, and the excavation of boars on outlying islands have aroused debate on the domestication of boars during the Jomon period. The biggest point of contention concerning claims of boar domestication has been the absence of the detection of domestication-related effects in boar bones dating from the Jomon period. However, we now know of one example where it is suspected that domestication-related effects exist among boar bones dating from the Jomon period. Given the fact that examples of boars being buried together with people and dogs have also come to light, it has become necessary to debate the points that boars have in common with people and dogs once again.

It is in this context that this paper introduces materials excavated from the Shimooda shell mound in Mobara City, Chiba Prefecture, and also re-examines earthen boar-shaped articles, boar burials, boars on outlying islands, and domestication-related effects in boar bones. As a result, when viewed in terms of cultural elements, we can be virtually certain that pigs were domesticated from around the Middle Jomon period. Furthermore, when viewed from the culturally significant fact that they were taken to outlying islands and from the standpoint of the discovery of domestication-related effects in their skeletons, we learn that there is a strong possibility that pigs were already being domesticated in the Early Jomon period. However, because of little skeletal change in pigs from the Jomon period, it is believed that they were raised in a rather rough manner whereby this somewhat slipshod manner of raising pigs allowed for cross breeding between wild boars and domesticated pigs. The implication of the virtual certainty of the existence of pigs is that the Jomon period was not a time when there was a simple hunting, gathering and fishing economy, but that it was a New Stone Age culture in which dogs and pigs were raised and cultivation of vegetation was used to some degree.